

DAM(Digital Asset Management: デジタル資産管理システム)を連携した、 ビスン教育の出版資源管理システムの構築プロジェクト

- デジタル資産管理ソリューション（製品名：IDAS）の導入で、資源へのアクセシビリティや管理容易性を向上。
- ワンソース、マルチユースによる重複費用の防止とシステムの柔軟性で、業務の効率が向上

現代人はコンテンツビジネスの時代を生きている。これにより、かつて紙の本をメディアとして、コンテンツを提供していた出版業界も電子出版や出版流通への参入によって業界全体の活性化を図っているため、戦略を立て直して事業に取り組み続けている。

しかし、期待した成果は出せず、新しいシステムに適應できないなどの問題で、業務効率が下がっているため悩みも増えている。

これに対し、既存の出版業界とは差別化された内部インフラシステムを備える「ビスン教育の出版資源管理システムの構築プロジェクトの事例」を通じて、ビスン教育のプロジェクトの構築時の悩み、優先事項や解決方法などの全般のお話を担当者から聞いてみた。

ビスン教育 パク・ジェウ S P



<写真：ビスン教育 出版事業部門 スマートラーニング部の責任総括、朴氏>

出版環境に合う DAM（デジタル資産管理）導入で、デジタルコンテンツの活用性の強化および多様かつ差別化されたサービスを提供

今回のプロジェクトの目的は、出版業界の特質に合う「DAM（デジタル資産管理）システム」を構築して、デジタルコンテンツの体系的な収集・蓄積、配信までできるように様々なフレームを提供することで利便性を高めることにあった。

そのために、ビスン教育様とシステムの構築過程を共有しながら、最適化したインターフェースを備えるようにすると共に、様々な形のデジタルコンテンツを安定的に管理・活用できるようにした。

Q. 今回のプロジェクトの背景について聞きたい

一冊の本を作成する過程の中で、数多い種類のリソースコンテンツが生成されるが、今まではそのリソースがきちんと管理されていなかった。そのため、同様のリソースを重複して生成したり、担当者が別々に保管していたものを紛失することもあった。

このような問題を解決するために、資産管理システムを構築することが決まった。決断は速かった。しかし、実行に移すにはそうは行かず、ノウハウや工夫が求められた。自主開発するか。それとも市場の常用ソリューションを購入し、カスタマイズするか。内部会議と外部開発会社との会議を繰り返して、議論を重ねながら、経験豊かな会社の検証されたシステムを導入・実装することにした。

その結果、内部の資源を同じ空間で管理できる方法としてDAMの導入が決まった。この導入で、資源の重複や流失防止、専門的なセキュリティの設定などの効果を創り出そうとした。

現在、ビスン教育は出版業だけでなく、オンライン授業、模擬試験の評価事業、学習塾のフランチャイズ事業、デジタル事業など、教育ビジネス全般を手掛けている。このようなビスン教育の多様な教育サービスは教科書・教材コンテンツから始まる。出版資産をうまく管理し、全分野で有機的に活用できるコアシステムを構築するため、効率のよい全社のデジタル資産管理ソリューションのIDASを導入することになった。

Q. プロジェクト推進の際、最も重視したのは

今回のプロジェクトで最も重視したのは、保有する資源を整理し体系的にまとめて保管し、容易に見つけて使えることだった。

また、物理的なファイルにメタデータをマッピングすることで、資源の活用度を高めることも重要であると思った。メタデータの登録によって、担当者ではなくても資源の種類と性質を容易に把握し、活用できる環境が構築された。このような環境は業務の情報共有を円滑にすることへの第一歩となると期待している。これから誰でもシステム上で必要な資源をより速く簡単に検索・ダウンロードできる。

つまり、各部署に分散されている出版資源を同じ空間に保管して、パート別の実務担当者が資源にアクセス、ダウンロードし、様々な形で活用できるようになるということだ。これによって、業務の効率が向上し、最終的にビサン教育の資産が徹底的に管理できることを重点目標にしてプロジェクトを進めた。



Q. I-ON Communications のソリューションを採用した理由?

自主開発よりは安定性を重視した。インターネットでこの条件に適合する DAM 会社を調べた際、I-ON Communications(以下、I-ON)を見つけたので連絡した。

I-ON Communications では事前会議、本会議、優先交渉期間の間、前向きな姿勢で出版業界ではよく知らない情報について様々なコンサルティングを提供してくれた。その過程で豊富な経験と抜群の技術力を確認できたので、自社は信頼できる会社であると確信、I-ON をプロジェクトパートナーとして迎えた。

出版業界はまだ DAM という単語すらあまり知らない。その分、出版資源管理システムの構築はリスクの高いプロジェクトである。だからこそ、システムの構築と運用面で起こりうる様々な問題へのサポートが切実な状況だった。I-ON は既に DAM 分野の最先頭を走る専門企業であるにもかかわらず、プロジェクト担当者の方々はいつも親切で謙遜な態度で私たちの話に耳を傾けてくれた。そして実現できることとできないことを明確に話し、実現できないことについては対策も提示してくれた。こういう点から、最終的に I-ON が出版環境に合う DAM を導入できると判断した。

I-ON は他のソリューション会社とは大きな違いを見せた。お客様のニーズを正確に把握・反映し、新しいサービスを提供した。例えば、より進んだ技術が開発された場合、先に自社の担当者に知らせ、アップデートサービスを提供することなど。

それに加え、I-ON はプロジェクト期間がかなりタイトだったにもかかわらず、強い意志でその日程を守った上、様々なサービスまで提供するなど、プロジェクトを成功に導いた。

Q. とても興味深い。I-ON Communications のソリューション導入後、最も満足している点について詳しく説明してほしい

一つ、出版関連の必要資源・コンテンツを同じ空間に保存することで、一元管理が可能になった。今は資源の重複開発の可能性がだいぶ低くなり、一度生成した資源を流失したりすることは完全になくなった。

一つ、DAM の導入によって、関連部署間の資源の要請・提供業務の効率が向上した点を挙げたい。諸事業の部署で必要な資源をたやすく活用できるようになった。

一つ、メタデータの登録で、保有資源の詳細な情報確認が可能になった。今は資源を開発した担当者がいなくても、どこに使われるか、著作権などの情報などが確認できるため、様々な事業で迅速かつ正確に資源をサービスすることができるようになった。

最後に、資源管理の必要性について全社員が気づいたこと。これはソリューション導入後、社内組織レベルでの一番大きい変化だと思う。

Q. ビサン教育の今後の計画は？

二つある。

その一つは、今はまだコンテンツ登録段階なので、既存の保有資源を DAM に正確に登録することである。

もう一つは、全社員が DAM を使いこなせるようにすること。書籍編集者の場合、常に時間に追われながら作業するしかなく、まだ DAM に慣れていないため、DAM の活用度が低い。そのことから、編集者に DAM の使い方を教え、多様な活用ケースを提供し、活用度を高める計画である。また、使用上での意見を集め、システムの高度化を実現するつもりである。

Q. 最後に I-ON に望むことがあれば

プロジェクトにおいて最も大事なはお互いのパートナーシップでもある。良いパートナーシップを築いていると、プロジェクトは順調に進み、その結果も期待以上のものになると信じている。

I-ON はプロジェクト中、問題が起きても、いつも一緒に解決方法を模索しながら迅速に問題を解消してくれた。

そのおかげで、今回のプロジェクトは満足そのものだった。この場を借りて、プロジェクトが成功に終了するまで協力してくれた I-ON にありがとうを言いたい。

一方、今後 DAM を使うに当たり、機能改善の要望が出てくるかも知れないと思う。プロジェクトの期間だけでなくそれ以外の時間にも、DAM 専門会社 I-ON が様々な構築事例と、ノウハウで問題を解決できるように、今後も我が社の出版管理システムの運用に力を貸してほしい。

[(株) I-ON Communications 会社紹介]

1999 年 7 月設立の (株) I-ON Communications は韓国のコンテンツ管理システム (CMS) およびデジタル資産管理 (DAM) 分野の代表企業として、エンタープライズコンテンツ管理 (ECM) を含め、Web コンテンツ管理 (WCM) 全般にわたる多様なソリューションと製品を提供しています。製品の技術力と優秀な品質、顧客に対する信頼性に基づいて日本ソフトウェア市場で登場以降様々な企業様から支持されています。

海外市場で認められたグローバル標準の技術力で 2014 年も世界中のお客様にコンテンツ管理ソリューションを披露していきます。